



北・その自然と人

札幌市博物館活動センター情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

札幌市博物館活動センターは自然系総合博物館の計画推進のため、市民とともに教育普及活動、展示・交流、調査研究、資料収集保存を行う活動拠点です。

2011.10 No.46 発行・札幌市博物館活動センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目 リンケージプラザ内5階

TEL 011-200-5002 FAX 011-200-5003 <http://www.city.sapporo.jp/museum/>

札幌の湧き水

今回の企画展「札幌原風景 メムの記憶～湧き水の地形をたどる～」展のため、学芸員は自転車に乗って、札幌にあったとされる13カ所の湧き水（アイヌ語で「メム」と呼ぶ）の痕跡を踏査しました。なぜ、札幌にはこれほど多くの湧き水があったのでしょうか。それを知るために川がつくる地形である扇状地を知る必要があります。

豊平川の源流は、支笏湖の北縁にある小漁山こいざりやまです。そこから札幌西部に広がる山々を削りながら、1,235mの標高を72.5kmの距離で流れ落ちてきます。その流れは日本有数の急流河川とも引けを取りません。このエネルギーが上流域の切り立った谷（V字谷）を形成しました。豊平という名は「崩れる（あるいは切れる）・崖」という意味のアイヌ語「トイ・ピラ」を語源としています。急な山あいを流れ落ちてきた豊平川は、現在の藻南公園付近で突然、平野に出ます。

傾斜がなくなった豊平川は一気に運ぶ力が弱まり、砂礫を置き去りにしてさらに低地へと緩やかに流れていきます。札幌の語源となった豊平川扇状地は、豊平川のはたらきによって上流から運ばれた砂礫（小さな石ころ）が扇を開いた形に積もってできた台地です。そこは水はけがよく、人間が住むのによい安定した土地でした。それと同時に、川筋は伏流水となって扇状地の地下を流れ、扇状地の先端で湧き出していました。アイヌはこの湧き水を「メム」と呼び、冬でも凍らず湧き出る水は大切な生活用水となりました。さらに、明治以降は産業の発展に欠かせない工業用水として一役かいました。

展示を通して、扇状地が完成した1万年前の札幌の原風景を訪ねることで、多くの先人が暮らし、札幌のマチの基盤を形成したメムの記憶をお伝えできればと思います。（山崎）



展示中の立体地図。くねくねと曲がった線が湧き水を水源とする川筋だったところ。現在の様子も写真で展示。

開催中!
11/5
まで

第33回 i・ミュージアム企画展
札幌原風景
メムの記憶
～湧き水の地形をたどる～

2011.9.20(火)～11.5(土)
会場：札幌市博物館活動センター
※交通案内：最後のページをご覧ください。

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse（ギリシャ語）と通信や手紙を意味するLetter（英語）からMuseLetterと名付けました。



大学生おすすめの本

今年は博物館実習で初めての試みとして、学生さんに自分がこれまで読んだ本の中で、自然に関係する要素を見つけ出せるものを紹介してもらいました。最近話題の「ビブリオ・バトル」にヒントを得て実施しましたが、お気に入りの本について熱く語る学生と話しているうちに、知らず知らずのうちに身近な地名や各自の人生経験などに話題が発展し、とても盛り上がりました。

おすすめ！ by 札幌市立大 Yさんより

「山の名前で読み解く日本史」

谷 有二 著 (青春出版社、2002年)

日本では「記紀」の時代から山に対して名を付け信仰の対象としてきた。そんな身近な山についての伝承・文化・名前にまつわる実証検分の本。桃太郎伝説の実態や鎮魂の森の広がり、「山」の字の発音による由来の違いも紹介。朝鮮半島伝来の山名、アイヌ文化の山や地名の意味にも触れている。

山について多角的な知識を深めることができるので、読み終えてから山や自然を見回すと新たな気づきが生まれることだろう。



「進化の不思議な大爆発

魚たちの上陸作戦

生命40億年はるかな旅2」

NHK取材班 著 (日本放送出版協会、1994年、絶版)

NHK番組の内容をまとめたムックの第2巻。カンブリア紀の生物と魚類・両生類をテーマとして、年代順に記述している。化石の写真や発掘現場の再現CG、骨格復元図などのグラフィックが豊富なため、理解しやすく、現代の生物との比較もこの1冊でたのしむことができる。

巻末には全国の博物館・水族館の案内も載っているので、この本で予習しておくことで身近な生物たちの違った側面がみえてくるのではないだろうか。

おすすめ！ by 札幌市立大 Sさんより

「月光ゲーム～Yの悲劇88'～」

有栖川 有栖 著 (東京創元社、1994年)

キャンプ場に来ていた17人の学生たちが、火山噴火により山中に閉じ込められてしまう。限られた食料、灯りのない暗闇という極限状態で事件が起こる。犯人は誰なのか、この山から脱出できるのか。手に汗握る青春ミステリーだ。火山噴火の衝撃や恐怖、人々のパニック状態などが緊張感を生み出し、火山灰を鍵とした推理も見どころである。

荒ぶる自然の中で翻弄される人間たちと、山中という背景を活かした謎解きを楽しみ、真実に到達してほしいと願う。

「マークスの山」

高村 薫 著
(講談社文庫、2003年)



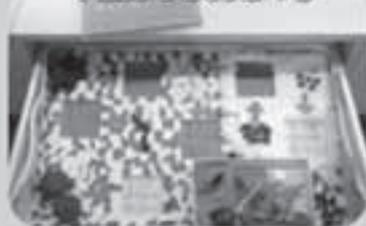
南アルプスで起こった16年前の事件に起因し、東京で連続殺人事件が起こる。犯人の心に潜む「暗い山」と事件の真相を、合田刑事が追う。

犯人の心の闇、被害者の関係性、全てが“山”と関連づけて描写されており、寒々しく鋭く突き刺さる南アルプスの冬景色が、より人物の心情を深く印象づけている。

警察内部の圧力や組織社会の影などもリアルに表現されている。第109回直木賞受賞作。

博物館実習は9月6日～9月27日に実施し、期間中に酪農学園大学、武蔵女子短期大学、帯広畜産大学、札幌市立大学の合計7人が博物館の仕事を実践しました。今年も展示内の引き出し展示の企画・製作(タイトル下記)を行いましたので、みなさん、ぜひ触って、探して、楽しんでください。

「どんなうんち？」



「くらべてみよう！海の仲間たち」



「たまごのかくれんぼ」

